心肺蘇生法に神様は必要か？

「ええっと、まずは、私達がどうしてこちらの世界に来たのか、それをお話しましょう」

　俺の部屋で、妖精モドキが空中で一回転してそう言った。

　なんで一回転したのだろう？

「まあ、それを説明する前に、私達の事をお話する必要があるのですが……」

「構わん。話せ」

　ベッドに腰掛けていた俺は、頷いて話を促す。

　訳が分からなくて悶々としていたので、正直イライラしていたのだ。聞くことを聞いて、さっさと楽になりたかった。

「え……えっとですね」

　俺の物言いに、顔を引き攣らせながらも妖精モドキは続ける。

「私達が、冥府から来たことは、もうすでにお話しましたよね？」

「ああ。覚えている」

　あんな話、そうそう忘れられそうに無い。目の前の存在が特異なこともあるし、そこは完全に信じている。

「では、その冥府という場所がどのような場所であるか、それをまず最初にお話いたしましょう」

　そう言うと、妖精モドキは空中で指をパチンと鳴らす。

　すると、妖精モドキのすぐ横に、何やら黒いものが現れた。

「……っ？　な、何だこれは？」

　そう言ってすぐに、俺はこの黒い物質の正体に予想がついた。これはまるで……こっちの世界で言うところの、液晶モニターに近い。

「これは、私の能力ですね。冥府の様子を映し出すことが出来るんですよ」

　妖精モドキがそう言った刹那、モニターに画面が映し出される。

　それを見て、俺は言葉を失っていた。

　混沌……という二字熟語がぴったりと当てはまるだろうか。

　映し出されたその世界には、見渡す限りの荒野が広がっていた。空は黒く、時折、黒い空が光っている。まるで雷でも起きたかのようだ。その場にいれば、さぞ素晴らしい轟音が鳴り響いているだろう。

　大地は荒れ果て、草木一本存在していない。土は水を欲しているかのように、見るからに乾ききっていてひび割れていた。

　およそ、生命体が存在するのには、あまりにも都合が悪すぎるその世界から、妖精モドキ達は来たと言う。

「ひどい世界でしょう？」

「……すまない」

　思わずそう思ってしまったのを見透かしたかのように、妖精モドキは悲しそうな声で俺に聞いてきて、俺はそう言う他無かった。

「確かに元々こんな場所でしたけど、それでも生き物はいたんですよ」

「そうなのか？」

「ええ。この冥府という場所は、私達の住んでいる、別の世界の罪人を閉じ込めておく場所でしたから」

　なるほど。つまり、こっちで言うところの刑務所みたいな場所だった、という訳か。

「なんか、俺の思っていた場所とは違ったな。俺のイメージだと、冥府って死んだ人間のうち、現世で悪いことをした奴の魂を閉じ込めておく場所だと思っていたんだが……」

「冥府、という場所は、瞬様の世界ではそのように知られているのですか？」

　少し驚いたような顔をする妖精モドキに、俺は「まあ、作り話だけどな」と付け加えた。

「で……冥府って場所が、そういう所なんだってのは分かった。それで？　なんかさっき、『今と昔は違う』みたいなニュアンスだったけど」

「え……ええ。そうです。話は……そうですね。こっちの世界の時間で言うと、三日ほど前でしょうか？」

　妖精モドキは、部屋の時計を見ながら首を捻る。

「ここからは、私自身も詳しくは知らないのですが、私の世界の八人の神が、冥府にある王宮で定例会議をしていました」

「神？　定例会議？」

　最初はともかく、後のほうはおおよそ『冥府』という言葉に似つかわしくないものを聞いた俺は、思わず妖精モドキのように首を捻る。

「そちらについては、後でお話をしましょう。話を戻すと、その定例会議の最中、敵襲にあいました」

「敵襲？」

「ええ。何万もの怪物の大群が、王宮に押し寄せてきたようなんです。私は丁度その時、王宮のとある書斎を掃除していた最中でしたので、敵襲に気がついたのは、実は色々と事が終わった後でした」

「な……なんか間抜けだな。お前」

　掃除をしていて、敵襲に気がつかないとか、そんなことが果たしてあるのだろうか？

　だが、妖精モドキは悔しそうに唇を噛む。

「王宮の地下で、外からの雑音は一切排除された空間でしたので……」

「そうか……すまない」

　思いのほかありうる事情に、俺はサッと妖精モドキから目を逸らす。

　だが、妖精モドキはそんな俺の行動に気が付くこと無く、話を続けた。

「私が敵襲に気がついた時には、八人の神のうち、六人がいなくなっていました。後でその残った二人に聞いてみたところ、どうやら別々の場所で敵襲を食い止めていたそうです」

「……首謀者は誰だ？　神様が八人も集合している場所に、わざわざ敵襲なんか仕掛けるなんざ、無謀もいいところだろう？」

　一体どんな自殺志願者かと思って聞くと、妖精モドキは一瞬だけ目を伏せる。

　だがすぐに俺の方を見て、静かに口を開いた。

「タンタロス……かつては冥府のタルタロスに幽閉されていた、昨日襲ってきたテュポーンを操っているやつですよ」